
夕鶴

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕鶴

【Nコード】

N8043E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

素朴で心優しいよひようは怪我をしている蔓を助けました。暫くしてつうという美しい女が彼のところを訪れましたが。有名な童話をアレンジしてみました。

第一章

夕鶴

東北のある村によひょうという若者がいました。

家は貧しく一人身で風采も冴えませんでした。が真面目で素朴で気のいい親切な若者でした。彼がある雪の日仕事を終えて家に帰る途中。一羽の鶴が罾にかかっているのを見ました。

「こんなところに罾が」

村の誰もここに罾なんかかけないのにおかしいなと思いました。それでも実際に鶴は困っていました。右足を捕まえられて何としようとしています。ができません。いたのです。

そんな鶴を見て可哀想に思ったよひょうは鶴を助けてあげることになりました。それで鶴に近寄ってその罾を外してあげたのです。

「随分と古い罾だな」

その罾を見て最初に思ったのはこれでした。

「誰かが前に仕掛けて忘れていたんだな。けれどこれで大丈夫だ」

罾を外してから雪で一応血をぬぐってあげました。それから鶴に對して優しい声をかけます。

「もうこんな罾にかかるんじゃないぞ」

こう言って鶴を放してあげました。鶴は暫くよひょうを見た後で天に飛び去りました。よひょうはそれを見届けてから家に帰りました。それから数日後のことです。

家の中で草履を編んでいたよひょうのところに。扉を叩く音がしました。

「おやつ、誰かな」

その音に気付いて扉を開けます。すると白い服に黒い髪を持つ色の白い女の人がいきました。歳はよひょうと同じ位でしょうか。静かな顔でそこに立っていました。

「あの」

「あつ、はい」

ついついその女の人に見惚れていたよひょうは慌てて女の人に言葉を返しました。

「何でしょうか」

「旅の者です」

「旅のですか」

「はい」

よひょうに対してこくりと頷きます。頷いたその首はながくまた実に綺麗な首でした。よく見ればその手に傘や旅道具を持っています。

「道に迷いまして」

「こんな雪の日ですか」

「そうなのです」

またよひょうに対してこくりと頷くのでした。

「それで。宜しければここに泊めて頂けるでしょうか」

「ここにですか」

「いけませんか？」

その白い顔でよひょうに尋ねるのです。

「宜しければ」

「ええ、どうぞ」

よひょうは女の人その言葉を断るでもなく笑顔で受け入れるのでした。

「こんな雪の中に一人では。外に出たら危ないです」

「よいのですね」

「ええ」

よひょうはまた頷くのでした。

「さあ、早くあがつて」

そのうえで中に入るように勧めます。家の中に。

「丁度火鉢もつけてありますし」

「有り難うございます」

こうして女の人はよひょうの家にあがりました。家にあがるとよひょうと女の人はあれこれと話をしました。話によると女の人の名前はつうといって生まれはよひょうのいる国よりまだ北でした。何でも南に下るつもりが道に迷ったとのことでした。

しかも。つうには身寄りがないこともわかりました。

「ではお一人ですか」

「そうです。あなたは」

「おらもですよ」

よひょうは照れ臭そうに笑ってつうに答えるのでした。

「いや、この歳になってお恥ずかしいことです」

「左様ですか」

「ええ。それでですね」

恥ずかしそうにまた話すのです。

「相手を探しているのですが。どうにも」

「わかりました。それでですね」

つうはここで話すのでした。

「今晚泊めて頂く御礼がしたいのですが」

「御礼ですか」

「そうです」

またよひょうに述べます。

「実は。機を織ることができてまして」

「機を」

「はい。それでお返しをしたいのです」

おずおずとよひょうに話すのでした。

「それでは駄目でしょうか」

「いえ、そんなことまで」

しかしよひょうはそれを断るのですか。

「いいです。そこまで」

「いいんですか？」

「ここには系でいいのがないですし」

「糸は別に」

「いえ、それでもです」

言葉は柔らかいですがどうしてもといった感じです。つつを気遣ったもののがわかります。

第二章

「つうさんですよね」

「はい」

よひょうの言葉に頷きます。

「お客さんにそんな気遣いはさせませんよ。ですから」

「いえ、それでも」

つつも引きません。あくまでといった感じでよひょうに言葉を返します。

「御願います。是非」

「是非ですか」

「どうしても。いけませんか」

「いえ」

そこまで言うのなら。元来気の優しいよひょうはそれに頷きました。それで納得したのです。

「そこまで仰るのなら」

「有り難うございます。では今晚」

「今晚ですか」

「はい、今晚織ります」

こう言うのでした。

「お部屋をお一つお借りしますので」

「わかりました。では」

「ただ」

ここでつつは言葉を付け加えてきました。

「何ですか？」

「一つだけ御願ひがあるのです」

こうよひょうに告げます。

「一つだけ。宜しいでしょうか」

「それは一体」

「機を織っている間。覗かないで下さい」

「夜の間ですか」

「そうです。いけませんか」

「約束させて下さい」

これがよひよふの返事でした。

「絶対覗かないです。絶対にですか」

「約束して下さいますね」

「はい、絶対に」

優しい微笑みを浮かべて頷きます。こうして夜の間につつは機を織ることになりました。よひよふはその間隣の部屋で布団にくるまっています。そのまま眠るのですがその彼の耳につつが機を織る音が聞こえてきます。

かつたんかつたん

「織ってくれているんだな」

そう思いまた寝ようとしたその時。障子の向こうの影が見えました。それは。

「・・・・・・そうだったんだ」

よひよふはわかったのですがそれで目を閉じました。そのまま眠りにまた入り朝起きてみると。目の前にはつつが座っておりその手には綺麗な反物がありました。

「これをどうぞ」

「反物ですか」

「はい、これ売れば幾らかのお金になると思います」
静かに微笑んでの言葉でした。

「ですから。どうぞ」

「有り難うございます」

よひよふは布団から起き上がりました。そのうえでつつに対して深々と頭を下げてお礼を言うのでした。彼はにこにこ笑っています。

した。

「それでは有り難く」

「はい」

「それでつうさん」

「ここですよひょうはつうに尋ねるのですた。

「何でしょうか」

「暫く雪が続けばどうされますか」

「どうされるといいますと」

「ええ。その間のことです」

「穏やかな笑みのままでつうに述べるのですた。

「よかつたらその間こちらで泊まっていかれては」

「昨日だけでなく」

「その様な水臭いことは申しません」

「こう彼女に告げます。

「ですから」

「宜しいのですか？」

「はい」

「頷いてもみせました。

「つうさんが宜しければですが」

「それでは。暫くの間」

「はい、暫くの間」

二人は言葉を重ねます。自然と心もそれに重なっていつていたのですがまだその自覚はありませんでした。それでもお互いに言い合
うのですた。

「御願います」

「こちらこそ」

こうして雪が止むまでの間よひょうの家に留まったのですがそれが次第に長くなり気付いた時には。二人は夫婦になつて静かに、ですが幸せに暮らしたのですた。このことはすぐに村中の評判になりました。

「あのよひょうが遂にか」

「しかもあんな奇麗なかみさんをな」

皆羨ましいなり嬉しいなりでした。よひょうのことは皆知っていましたので心から祝ってくれています。よひょうはそのことに気持ちをよくしていつつといつも仲良く暮らしていました。つつはそんなよひょうと一緒に畑仕事をしたり彼に蕎麦掻を作って食べさせてあげたりして。時には機を織ってそれで反物を作ってあげたりしていました。この反物がまたえらく評判だったのです。

「つつさんはな」

「全くだ」

村の人達は口々に言います。

「こんな反物を織れる人なんていないよ」

「どうしたものだか」

「いや、つつは凄いだろう」

よひょうも自分のことではないのに皆にほくほくとした顔で自慢しています。

「こんな反物を織れるのは他にはいないだろ」

「それ、高く売れるだろう」

「まあな」

よひょうはあまりお金は欲しがらないのですがそれでもつつの反物が評判になるのは嬉しいのです。そのことを素直に喜んでいたのです。

第三章

「しかしこんないい絹他にはないよな」

「織り方も凄いよな」

「だから言っただろ。つうは凄いんだって」

「ああ、全くだ」

「どうしてこんなのが織れるんだか」

「不思議だよ」

誰かが不意にこう言いました。

「どうやったらこんなのができるんだ？」

「あつ、そういえばそうだな」

「そうだろ」

話は自然とよひょうの望まない方向にいました。彼はそれを前にして嫌な顔になりました。それでもそれがどうしても決して言わないのでした。

「なあよひょう」

「これはどうやって織っているんだ？」

怪訝な顔でよひょうに尋ねます。よひょうは彼等に対して顔を曇らせません。それでもこの場は何とか取り繕うことにしたのでした。

「いや、おらは知らないよ」

「知らないのか」

「だから。織り方がいいんだよ」

そういうことにしました。知っていることを言うわけにはいきませんからです。そんなことをすればつつが困る、だからここは彼があえて嘘をついたのです。

「だからだよ」

「それでか」

「ああ、それでだよ。それでな」

話を変えることにしました。

「金があるし酒でも買おう」

「酒か」

「それで楽しもう。なっ」

それで誤魔化すことにしました。これ以上嘘を言うのも心苦しくそれを選択したのです。正直な彼は嘘をついたりすることが苦手だったのです。

「じゃあそいうことでな」

「わかったよ」

「それじゃあな」

皆もそれに乗ることにしました。それでよひょうの奢るお酒を楽しみました。そうしたことが何度かあってもそれでもよひょうは本当のことを決して言いません。けれどその一部始終がつうの耳にも入っていました。つうはそのことで心を痛めていました。それでもよひょうは家ではいつもつうに優しくにこにこしていました。けれどある日のこと。二人で晩御飯を食べていると不意につうが彼に言ってきたのです。

「あの、よひょう」

「どうした、つう」

急に箸を止め俯きだしたつうに対して問い掛けます。

「今まで黙ってきたけれど実は」

「どうしたんだ？」

「私の反物はあれは」

「ああ、いいさ」

けれどよひょうはここでつうが何を言うか察して。彼女が言う前にこう言ったのです。自分から。

「そっから先は言わなくていいさ」

「いいの」

「言つて。どうにもならないだろ」

御飯を食べながらこう告げるのでした。

「そっじゃないのか？」

「それはそうだけれど」
「言ったら。駄目だよ」
これまでも変わらない優しい声でした。
「言ったら。ここにいらなくなるだろ」
「よひよう、あんたひよつとして」
「だからさ。言わないんだよ」
「そうなの」
「言わないでいたらおらと一緒にいられるよね」
「ええ」
よひよつの言葉にこくりと頷きます。
「そうよ」
「だったらずっと言わないでよ。それでおらと一緒にいて」
「一緒に」
「そう、ずっとだよ」
つつを包み込む言葉でした。
「ずっとね」
「わかったわ。それじゃあ」
また頷きます。そのうえでの言葉でした。
「言わないわ。ずっとね」
「そう、ずっと一緒だよ」
笑顔でつつに告げた言葉。この言葉はつつの言葉に残りました。
それですつとずつと。何時までもよひようとつつは一緒に幸せに暮らしたのです。そのことだけは言わずにお互いに優しく。そうして暮らしていったのです。二人一緒に。

夕鶴 完

1
1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8043e/>

夕鶴

2010年10月8日15時30分発行